

第251回 今月読んだ本
福本和夫 思想の再解釈
—「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ（4）

第2章 パリの下宿に籠る —就職、留学（1920—1924）

1920年3月に大学を卒業した福本和夫が文部省に任じられて松江に赴任したとき、松江高等学校は開校していなかった。設立準備の段階であり、翌年4月に入学生を迎える。

和夫の最期まで生活の面倒を見た長女の逸子は父についてこう語る。

私の父は、東大を卒業するとすぐに島根の県庁に勤めました。県庁でも一番楽なところだったので内務部に勤めたのですが、仕事があわなかったようです。ちょうど松江高校が大正10年（1921年）にできて、父は新設松江高校の創立事務、兼高校教授となります。

（「父・福本和夫と生きて」、『裸像』所収、245—246頁）

内務部とは現在でいうところの総務部であり、設立準備をした上で教授になることが赴任前から確約されていたのではないかと推測される。

この頃、福本は結婚している。相手は島根県八束郡長・吉村政次郎の長女・艶である。しかし、両者の気が合わなかったためか9ヶ月で結婚生活は破綻し、離婚後、艶は女兒を出産した。和夫は逸子と名づけ、郷里の父に養育を頼んだ。艶との結婚を帰国後とする研究書もあるが、逸子の回想が時期の特定に役立つ。文中の「5歳（1925年）」とは数え年であろう。

私は幼少の頃一人、田舎の祖父母にあずけられて育てられました。ちょうど私が5歳（1925年）の時、まだ父が非合法活動に入る前ではなかったかと思うのですが、父がちょっとだけ郷里の田井に帰ってきた時がありました。田井は60戸ほどの村でしたが私は、父に田圃の畦道をだっこされて、村の真ん中の駄菓子屋で、砂糖のたっぷりついたあめ玉を五つぐらい買ってもらった記憶があります。私が父にだっこされたのは、たったこの一度だけでこれが最初で最後でした。以後、父とは17年の別れ（1942年1月に予防拘禁所で再会—岩田注）になるのです。

（前掲245頁）

福本は一高帝大時代の自らの思想遍歴を語っていない。清水（静岡県）への旅行の記述から推測できるに過ぎない。

帝大に入学した1917年の暮れ、福本は興津の旅館に1泊し、三保の松原、高山樗牛（1871—1902、文芸評論家、思想家）の墓を詣でて帰京したことがある（興津、三保の松原、樗牛の墓は静岡市清水区にある）。興津の旅館に偶然にも東京高等商業学校（現一橋大学）教授の福田徳三（1874—1930）が来宿しており、学者たちの評判や『資本論』を3回読んだ自慢話などを聞かされた。『資本論』全3巻が完訳されたのは1924年であり当時は原書で読むしかなかった。福本が『資本論』を原書で読んだのはドイツ留学中のことである（第1章参照）。文学、哲学、美学など多岐にわたる評論を展開し、日本主義、ロマン主義、ニーチェ主義、日蓮主義など思想的に推移した樗牛に関心をもったところを見ると、マルクス主義とはある意味で対極の思想に親和的だった時期があったのだろう。（「社会主義」は貧困や格差をなくして平等な社会を作ろうとする思想、「共産主義」は社会主義を発展させて階級なき社会を目指す思想、「マルクス主義」はそれらに理論的基盤を与える思想である。厳密には区別しなければならないが、本稿ではほぼ同じものとして用いる場合があることをお断りしたい。）

酒もたばこも嗜まない福本はどのような生活を送っていたか。私生活について語らない福本はマルクス主義を本格的に学び始めたきっかけを詳しく回想している。

わたしのマルクス主義研究は、唯物史観の研究にはじまる、
と書いていい。そしてわたしが、いわゆる唯物史観の公式（社会を土台・下部構造とそれに規定された上部構造とで構成されたものにとらえ、下部構造における生産力と生産関係との矛盾が弁証法的展開（階級闘争）を惹き起こすことによって、人類史はアジア的生产様式→古代的生产様式→封建的生产様式→ブルジョア的生产様式と進み、さらに社会主義・共産主義へと移行するというマルクス『経済学批判』の定式化—岩田注）なるものを、原文ではじめてみるのができたのは、河上博士があらわされた『唯物史観研究』という書物においてであって、1921年のことだから、約30年の昔になる。当時わたしは、島根県の松江に新しくできた高等学校に、最も年少の教授としてつとめ、法律学・経済学を担当していたが、唯物史観の要約を、初めて原文で読んだ時の感激と、さっそくそれを自分でガリ版ですって、学生諸君に解説した満足とを、いまも眼前に、思いうかべることができる。わたしはこれによって、はじめて世界観・人生観を確立し、いわゆる安心立命の境地に到達しえたように感ずると共に、それからわたしは非常に健康になっていったのである。（『霧笛』64—65頁）

「河上博士」とは京都帝大教授の河上肇（1879-1946）である。朝日新聞に連載した『貧乏物語』（1917年）はベストセラーとなり刊行から2年で30刷になった。一般読者はイギリスの例を数多く取り上げながら貧困問題に切り込んだ同書に大いに共感した。しかし、下記のように問題解決の道筋があまりにも安易過ぎる、と福田徳三や社会主義者の堺利彦（1871-1933）らによって批判された。少々表現はきつくなるが、大正デモクラシーの風潮に沿ったリベラル派のレベルは「この程度」であった。

さればもし世間の金持ちがいっさいの奢侈ぜいたくを廃止するならば、たとい社会には依然としてはなはだしき貧富の懸隔を存し、また社会の経済組織もすべて今日のままに維持せらるるとも、私のいうがごとき貧乏人（すなわち金持ちに比較していう貧乏にあらず、肉体の健康を維持するだけの生活必需品をさえ享受することあたわざる状態にあるという意味の貧乏人なり）は、すべて世の中から跡を絶つに至るべきはずである。これ余が、富者の奢侈廃止をもって貧乏退治の第一策となすゆえんである。 （青空文庫）

第1次世界大戦を契機に進展した資本主義経済は「持てる者」と「持たざる者」の格差を急速に拡げていった。いかにして格差社会を是正していくのか。大正デモクラシー下でこの一大問題を解決するヒントを提示できる社会理論はなかった。

河上は1920年からマルクス主義研究に着手し、1921年に『唯物論研究』を発表する。著名なマルクス主義者として講義、執筆活動などによって学生に大きな影響を与える。1928年に京都帝大を追われ（辞職勧告後に依願免職）、1932年に日本共産党入党、潜伏活動に入る。翌年に治安維持法違反で検挙、起訴。1933年に再び検挙、起訴され懲役5年の判決を受け下獄。1937年、恩赦によって出獄した。

福本は留学後、河上のマルクス主義解釈には弁証法が欠けている、と鋭く批判することになる。福本の指摘を受けて、河上は弁証法を学ぶために西田幾多郎（1870-1945）を訪れる。そのとき紹介されたのが若き俊英、三木清（1897-1945、哲学者、近衛文麿の私的シンクタンク・昭和研究会の主要メンバー、敗戦直後に獄死）であった。

先を急ぎ過ぎたようだ。

福本が唯物史観の公式に出会ったのは27歳のときであった。若者は人生の助走期間にさまざまな物理的・精神的出来事を体験する

ことによって人生の基盤、依って立つ場を求めようとする。福本にとって「安心立命の境地」はマルクス主義となったのである。

マルクス経済学者の渡辺寛は、福本のマルクス主義への接近の仕方が通常とは異なる、と指摘する。

従来の日本の社会主義者は、大部分が、青少年時代に、日本社会に立ちだかっていた「非合理」と「貧困」とに、いきどおりを感じ、そこから社会主義へと、なんらかのきっかけを媒介として、はいりこんでいったのであるが、福本の場合は、こうしたコースとはかなり異なるものであった。かれの場合は、ヒューマニスティックな心情を原動力にして、社会主義へ、マルクス主義へはいりこんでゆくというよりは—もちろんそうした心情に欠けていたというのではないが—、むしろ、最初に知的興味からマルクス主義を探究するようになり、それに神童—秀才系列の野心が裏打ちしたという面がかなり強かったのである。（「福本和夫」1966年、前掲『福本和夫の思想』85—86頁）

「情」からでなく「知」からマルクス主義に入門した、という渡辺の主張は単純過ぎるにしても、社会を下部構造（経済的構造）と上部構造（政治的、法制的、社会的、精神的な諸関係・形態）に分類し、下部構造における生産力と生産関係の矛盾に歴史の原動力を発見したマルクス主義理論に魅了されたことは想像に難くない。福本には人間関係を左右する「情」に動かされがちな旧来の社会主義運動家にはない理論的構想力があつた。後に、理論からイデオロギー（実践の行動原理）を導く演繹的な福本イズムが左派の思想界を席卷することになるのである。

1922年3月、福本は2年間のヨーロッパ留学のために春洋丸でサンフランシスコに向けて横浜港を出発する。

松江高校では父が一番若くて文部省の在外派遣研究員になったのですが、校長先生から「君、ものには順序というものがあるから」といわれ、留学は早すぎるととがめられたと聞きます。しかし父は大正11年（1922年）3月、2年間のヨーロッパ留学に出発し、さらに曾祖父から贈与された田圃を売り払って得たお金で半年間留学期間を延長したのです。

父はまた、田圃を売ったお金で本を買ってしまったようです。田舎の土蔵……の下は全部本で埋まっていました。きちんと釘付けした厚い洋書が積まれていました。（『裸像』246頁）

文部省からアメリカ、イギリス、ドイツ、フランスの留学を許された福本の詳しい動向はわからない。日本を発っておそらく2ヶ月後にはドイツにいたこと、翌年5月にパリへ移ったこと（前田寛治が駅ーパリ北駅かーで出迎えたこと）は確かである。アメリカ、イギリスはそれぞれ1ヶ月前後の滞在だったと思われる。

筆者の手許に福本が関係者に宛てたハガキがある。古本で購入した『福本和夫著作集 第5巻 葛飾北斎論』（こぶし書房、2008年）に挿まれていたものである。

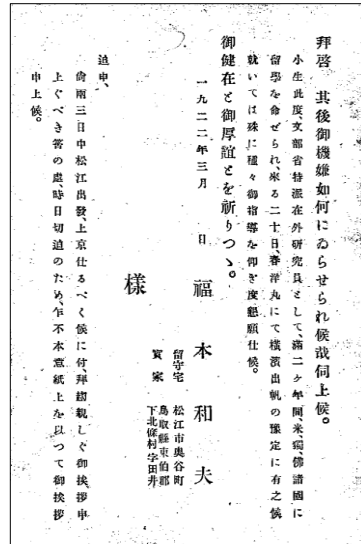
ヨーロッパ留学中の特筆すべきエピソードは3つある。第1にフランクフルト学派結成の契機になった「第1回マルクス主義研究週間」に参加して「社会研究所」の命名に関与したこと、第2にコルシュ（1886－1961）、ルカーチ（1985－1971）らと出会い西欧マルクス主義を直接的間接的に学んだこと、第3にパリの下宿に籠って初期3部作を準備しながら前田寛治と交流を深めたことである。それぞれについて帰国後の思想的展開と絡めて論じていこう。

戦後思想の中でフランクフルト学派の影響は大きい。「学派」と言っても明確な研究プログラムがあったわけではない。人文科学・社会科学の最先端の成果と社会哲学の学際的なコラボレーション（批判理論）を企図した一群の研究者集団を指すのである。学派を語ろうとすると大部の研究書が何冊も必要となる。例えば学派の成立事情に限ってもジェイの名著『弁証法的想像力ーフランクフルト学派と社会研究所の歴史1923－1950』（原書1973年、みすず書房、1975年、現在でも続いている学派の活動を1950年までに限定）に触れなければならない。ここでは代表的思想家と著作についてごく簡単に事典風に解説することにする。

フランクフルト学派の中心的な研究センターは1924年に設立された「社会研究所」であり、ヒトラーの台頭によってジュネーブ、パリ、ロンドン、ニューヨーク、カリフォルニアと転々として戦後は再びフランクフルトへ戻る。

学派は3つの世代に大別されることが多い。

第1世代の思想は、1960年代後半に同時多発的に世界中で起こった若者たちの異議申し立ての理論的背景となったことで有名である。1980年代以前に学生時代を送った人たち、とりわけ1



960年代の「怒れる若者たち」にとってはなじみの深い思想家たちであろう。

第1世代はタレント揃いである。ホルクハイマー（1895-1973、学派の総帥）とアドルノ（1903-1969）の共著『啓蒙の弁証法』（1947年、学派の代表的著作、啓蒙が神話（ナチスの野蛮）に頹落する過程を哲学的に考察）、アドルノ『否定弁証法』（1966年）、ベンヤミン（1892-1940）『暴力批判論』（1921年）、フロム（1900-1980）『自由からの逃走』（1941年）、マルクーゼ（1898-1979）『一次元的人間』（1962年）。著作のタイトルを眺めるだけでも、啓蒙的理性、合理主義が権威主義、非合理主義に絡めとられている現代社会（当時）を分析し、搾取されている人間に解放をもたらすための思想的方向性を示唆しようとしていることがわかる。

第2世代の代表格はハーバーマス（1929-）であり、『公共性の構造転換』（1962年）、『コミュニケーション的行為の理論』（1981年）がよく知られている。公共性、熟議民主主義の理論などを構築しようとする試みには第1世代とは異なり近代的理性への信頼が認められる。

第3世代は世界的に影響を持つ思想家がいない。ハーバーマスがフランクフルト大学教授のときに助手を務めたホネット（1949-）は、『承認をめぐる闘争』（1962年）で師のコミュニケーション理論に基づいた承認理論について考察している。

フランクフルト学派誕生の詳しい経緯は『弁証法的想像力』に譲るとして、ここでは福本和夫に関するエピソードを取り上げたい。

1974年、フランクフルト大学で同大学附属社会研究所の創立50周年記念集會が開かれた。研究所の「公式」の創立は1923年である。その年にヘッセン人民州（ワイマール体制下の名称、戦後はヘッセン州）の文部省令が発出され、研究活動が開始された。翌1924年に新たに竣工した研究所の建物が正式に開館する。

1973年、記念行事の一環として社会研究所の創立者、資金提供者であるヴァイル（1898-1975）の講演が行われた。聴講者の一人に名古屋大学大学院生の八木紀一郎（マルクス経済学専攻）がいた。以下は八木の論文「福本和夫とフランクフルト研究所」（1984年、前掲『福本和夫の思想』所収、182-193頁）による。

ヴァイルは講演の中で「ある日本人」に2回言及した。コルシュを社会研究所に招聘しようとしたときのことである。コルシュは断ってきた。ヴァイルの憶測だが、「ある日本人」にマルクス主義の個人教授を頼まれてドル建てで受け取っていたので、現金収入があ

るから当面はフランクフルトに来られない、というのが理由だったのかもしれない。

2回目は研究所の命名の経緯を語る際である。当初の「マルクス主義研究所」の案はドイツの大学が保守的であることを考慮して取り止めになった。文部省からは「フェリックス・ヴァイル研究所」を提案されたが、個人名を冠することに反対したヴァイル自身が辞退する。「社会研究所」に落ち着いたのは「ある日本人」の示唆による。

講演後に八木はヴァイルに質問した。「ある日本人は誰か」と。ヴァイルは「フクモト」と答えた。八木は耳を疑った。それまでフランクフルト学派に日本人が関わっているという話は聞いたことがなかったからである。

ヴァイルの父はドイツを去ってアルゼンチンに赴き、ヨーロッパへの穀物輸出で財を成した。ブエノスアイレス生れのヴァイルはフランクフルトのギムナジウム（高等学校）、大学に進み政治学博士号を取得する。父と母の財産を受け継いだヴァイルはヘーゲル（1770-1831）の弁証法、フロイト（1856-1939）の精神分析などとマルクス主義を融合した社会哲学を開拓する「急進的冒険の試み」を援助し始める。社会研究所が創立される1年前である。

そのような試みの最初のもは、テューリンゲン州のイルメナウで1922年の夏（春、5月あるいは、1923年という説もある。本稿では1922年とする—岩田注）に開催された「第1回マルクス主義研究週間 Erste Marxistische Arbeitswoche」であった。ワイルによれば、「その目的」は「マルクス主義のさまざまな潮流が、ともに徹底的に討議する機会を与えられれば、“真の”ないしは“純粋な”マルクス主義に到達しうるだろうという希望」であった。1週間にわたる会期中に参加した者たちのなかには、ジェルジ・ルカーチ、カール・コルシュ、リヒアルト・ゾルゲ、フリードリッヒ・ポロック、カール・アウグスト・ウイトフォーゲル、ベラ・フォガラシ、カール・シュミュクレ、コンスタンティン・ツェトキン（有名な社会主義の指導者クララ・ツェトキンの二人の息子のうちの二男）、ヘーデ・グンベルツ（のちに、共産党の『赤旗』 Rote Fahne の編集者であったユリアン・グンベルツと結婚し、さらにあとでゲルハルト・アイスラー、次いでパウル・マッシングと結婚した）、それから、ヘッダ・コルシュ、ローゼ・ウイトフォーゲル、クリスチアーネ・ゾルゲ、カーテ・ワイルを含む幾人かの夫人、があった。多くの時間がコルシュの未完の手稿『マルクス主義と哲学』についての議論に捧げられた。（ジェイ前掲書4頁、訳者の荒川幾男は「Weil」を「ワイル」としている。また、

「Wittfogel」は通常「ウィットフォーゲル」「ヴィットフォーゲル」と訳される。以下、「マルクス主義研究集会」を「EMA」と略す。）

ヴァイルは「もっと野心的な企て」を構想するようになり、当初計画していた第2回EMAは沙汰止みになった。「もっと野心的な企て」とは恒久的な研究所の創設であった。

参加者のうち、ゾルゲ（1895-1944）、ウィットフォーゲル（1896-1988）は日本でも有名である。ソ連のスパイとして日本軍の動向を探ったゾルゲ（治安維持法、国防保安法によって処刑）はEMA当時は社会学部助手であった。中国研究者のウィットフォーゲルは文明の三重構造（「中心」「周辺」「亜周辺」）、水利事業と大規模灌漑農業に基づく東洋的専制主義（アジア的生産様式論）の概念を提示した。

ジェイの著作は1973年に刊行された。そこには日本人の名前はない。翌年、八木は「ある日本人」が「フクモト」であることを知る。「フクモト」＝福本和夫なのか。謎解きの過程は2段階である。第1にコルシュと福本和夫に関係がありEMAに参加したのか。第2に「社会」研究所の命名に福本のアドバイスがあったのか。

まずは文献調査である。1973年末に刊行された『労働運動年誌第1巻 カール・コルシュ特集』所収のブクミラー（ライプツヒ大学）によるコルシュ年表には、「1922年5月-チューリンゲンの森で第1回「夏期講座」」の参加者にジェイの著作にはない「フクモト」の名が見える。ブクミラーは「フクモト」と面識があったヘッダ・コルシュ（コルシュ夫人）に確認したからであろう。しかし、文献だけでは「フクモト」＝福本和夫であることは証明できない。

1974年秋、八木は福本和夫を訪ねた。事前に3つの質問項目、（1）コルシュとの親交、（2）EMA参加、（3）「社会研究」の提案、について手紙で説明していたため、福本は回答を準備していた。

（1）コルシュとの親交-ドイツに到着して唯物史観についての本をさがしたが、その時コルシュの『唯物史観の核心点』というパンフレットがあった。そんなに感心するものではなかったが、それで彼と話してみた。私は誰をも師としない性格の人間で、この場合も彼に教えを乞うたというわけではないが、彼の家を訪ねる時にはいくばくかの金をもっていった。こちらとしては何とも思っていなかったが、当時の先方としてはありがたかったかもしれない。彼は、当時イエナの新聞社の2階に住ん

でいて、暮らしは質素なものであった。彼は新聞によく書いていたが、彼の政治活動については私は詳しいところまで知っていたわけではない。私は旅行をよくしたので、イエナを留守にすることが多かった。1922年のクリスマスに彼に会ったことは覚えている。パリに行ってから手紙を出さなかったので、親交はとだえた。その後の彼の共産党からの除名（1926年）等のことは知らないでいた。コルシュの議論は、一般に法律論が多く、社会経済自体の研究にはなっていないという印象を受けていた。

(2) EMA参加—参加したのはコルシュにすすめられたからである。時期は5月でないような気がする。5月22日には私は、ロンドンのハイゲート墓地でマルクスの墓の写真を撮っている。場所はチューリンゲンの森かどうかは知らないが、畑のある小さな村だった。参加者で記憶のあるのは、ルカーチとコルシュ夫妻、ヴァイル、ヴィットフォーゲルといったところだ。やはりルカーチがとびぬけていたと思う。私自身は活発に討論に参加できたわけではなかったが、教授と紹介を受けたのでおかしかった。そのあとすぐに旅行に出たので、その後この企画がどうなったかは知らなかったし、ここで知り合った人達との手紙のやりとりもしなかった。

(前掲『福本和夫の思想』187頁)

「フクモト」＝福本和夫がEMAに参加したこと、コルシュと関係があることは本人の証言から明らかである。

決定的な証拠は、後にブクミラーがコルシュ夫人から入手して福本に送った1枚の写真である。そこには撮影者のヴァイル以外の福本を含む20人の男女が写っている（『裸像』扉写真）。

背景は麦畑で遠くにブドウ畑が見える。後列にゾルゲ（左から4人目）、ルカーチ（5人目）ら9人が並び（内1人は男児）、前列の左



端にヴィットフォーゲル、真ん中には寝そべるコルシュ、その左側2人目にアジア人がほほ笑んでいる。

では、研究所の命名についてはどうなのか。

(3) 「社会研究」の提案—私はフランクフルトを訪ねたことはなく、ヴァイルとはEMAであっただけだ。ベルリンに行ったらローテ・ファーネ社(1918-1933、ドイツ共産党機関紙「赤旗」)の発行社、最盛期には33万部を発行し自由主義社会の共産主義を牽引—岩田注)を訪ねなさい、とすすめてくれたのは彼だったと思う。彼は研究所の構想について話し、私も自分の考えである社会の研究について話した。

なぜ「社会の研究」と言ったかという、私の著作(『社会の構成並びに変革の過程』—留学中に準備して1926年に発表した代表作、岩田注)をみればわかるように、私の研究の対象は社会そのものであり、国家ではなかったからである。当時はみんな国家至上主義で、国法学とか国家学会等々と国家ばかりであった。文科には社会学もあったが、つまらないものであった。河上肇の『社会問題研究』(河上による月刊個人雑誌、1919-1930、河上が日本共産党の地下活動に入るため第109号で終刊—岩田注)も、明窓浄机して考えれば、云々といった姿勢のものばかりであった。労働問題や社会問題といった部分的なものではなく、全体としての社会、国家をも含んだ社会の研究が必要であり、それが唯物史観ではないか、と思ったのである。(前掲188頁)

第1回EMAの開催時期は確定しないとしても、福本がコルシュの誘いで参加したこと、ヴァイルに対して「社会」の研究をすべきであると提案したことは確かである。

第2のエピソード、すなわちコルシュ、ルカーチを学ぶ福本の姿を描く前に、留学当時のドイツを中心とした社会情勢を見ていくことにしよう。